

# 吾平を中心とした大隅の魅力と驚きの再発見！

## 第1回 建国神話の伝説地めぐり

令和2年6月20日（土） 講師：朝倉悦郎

### 1 本講座について

#### (1) 趣旨

吾平への60年ぶりのUターン者が、吾平を中心とした大隅の神話、歴史、名所旧跡、地質、災害、植物について、資料や人から学んで見て回り、個人的には再発見である「大隅の特徴・魅力・驚き」を、“独断的な見解”を交えて語る。

#### (2) 計画案（内容と順番は変更する場合があります）

回	月	日	曜	学習内容	学習方法	準備する物
1	6	20	土	建国神話の伝説地めぐり	座学	特になし
2	7	18	土	大隅の繁栄と苦難の歴史(1)	座学	〃
3	8	22	土	大隅の繁栄と苦難の歴史(2)	座学	〃
4	9	12	土	吾平の観光名所の魅力と不思議	座学	〃
5	10	17	土	吾平外の貴重な史跡	座学	〃
6	11	21	土	車で巡る名所旧跡	見学会	後日連絡
7	12	19	土	大隅の地質・地形・災害の特徴	座学	特になし
8	1	16	土	大隅の植物と利用の特徴	座学	〃

### 2 建国神話の伝説地めぐり

私が関東に居た頃、大場昇氏（鹿屋市出身のノンフィクション作家）と知り合い、その大場さんとの話や大場さんの著書から、私は大隅の歴史や建国神話に関わる場所に興味を持ちました。

私が吾平町の実家に移住する際に、大場さんから吾平に行ったら、是非、宮下にある神武天皇生誕伝説碑、イヤ塚などの建国神話にかかわる記念碑や神社などを見て欲しいと言われました。私の祖父の時代には、学校の遠足で行く有名な場所であったそうです。

そこで、私は吾平に来てから、親戚や吾平の知人に神武天皇生誕伝説碑の場所を尋ねましたが、知っている人がいないことが分かり、驚きました。それからは、一人で建国神話関連の伝説地を探し回りました。

大隅半島には、古事記と日本書紀に書かれている建国神話の初期の旧跡や神社がたくさんあります。現在では、それらは全国的には知られていませんが、大隅地域でもご存知でない人が多いようです。以下は、私が訪れた主な所です。







この石碑は、古墳にあった石室の3枚の蓋石の1つで、本に書いてあるように、ここは「今は水田になってしまった旧肝属川沿いの竜神宮の拝殿跡地前」であります。

もう1枚は、「平田明宅庭横の道路沿いにイボの神として」いる石碑で、下記の写真の右側にあるものと思われます。残る1枚の「田中昇宅隣接のT字路角に安産の神として祀ってある」石は、老夫婦が確かにあると言っていたが、見つけ出せませんでした。



石室の3枚の蓋石の1つの表裏



2020年10月20日に生誕地に隣接する家主の森園氏（86歳）が、畑の耕作のために現在お住いの根占から来ておられたので、以下のお話を聴きました。「ここはトヨタマヒメが急に産気づき、ウガヤフキアエズノミコトを出産した場所。昔は12月28日に地元の人が一握りのワラを持ち寄って長さ11ヒロ（16.5m）と33ヒロ（49.5m）のしめ縄を作り、蛇の姿にして飾る祭りがあり、また3月17日の野崎地区の鎌踊りの時は、最初にここで踊ってから野崎に戻って踊ったが、今はそれらが廃れた。この石板は吾平山陵を向いている。2、3年前に鹿大の研究者が掘って調査した。」

高山郷土誌（平成年4月1日発行）には、『森園神社は小高い円墳の上であって、むかしからお産の神様として崇拝されてきた。ここで、うがやふきあえずのみことが誕生されたと伝えている。』と書かれています。「大隅 昭和写真帖」には森神社と書かれています。森園神社が正しいのでしょうか。

## ② 飴屋敷跡

飴屋敷跡は、吾平町鶴峰地区にあります。

飴屋敷跡に関する伝説を、鹿屋市の市報をもとに書くと次のようになります。海の神様で本当の姿は大きな「わに」であるトヨタマヒメは、夫の山幸彦に、「出産の時は本来の姿に戻らなければなりません。絶対に見ないでください」とお願いしました。しかし山幸彦は、約束を破ってのぞいてしまいます。心外に思ったトヨタマヒメは産んだばかりのウガヤフキアエズノミコト（神武天皇の尊父）を残し、海に帰ってしまいました。乳飲み子を残された山幸彦は悲嘆にくれました。そこに一人の老婆が現れ、母乳の代わりに飴を練り、その飴のおかげで成育できたそうです。この飴屋敷跡はその飴を差し上げた人の住宅跡と伝えられています。飴の原料である米がたくさん採れそうな田んぼ地帯の中にあります。



飴屋敷の「飴」について、ブログ「鴨着く島」に興味ある情報があります。その要旨は、以下のとおりです。

”エチオピア南部原住部族は、パルショータというモロコシを原料にした発酵食品（発酵酒）を主食としている。それは幼児のような子供にすらこの発酵酒を薄めて飲ませている。パルショータというモロコシ製の発酵酒からの連想で、「乳の出ない叔母に養育されたウガヤフキアエズノミコトは飴を与えられて育った」という鹿屋市吾平町飴屋敷に伝承されたその「飴」とは、パルショータのような穀物（当地では当然コメ）を原料とする栄養豊富な発酵飲料だったのだろう、というところまでこぎつけたのだが、その発酵飲料を「飴」（あめ）というのはなぜかが疑問になって来た。

日本書紀の神武紀に「飴」が登場するのである。日本書紀の神武紀に「飴」が登場し、「水無くして」作られた「飴」は「たがね」と呼び、水を加えて発酵させたのを「あめ」と呼んでいて区別がなされている。”

飴屋敷のおばあさんが乳飲み子のウガヤフキアエズノミコトに与えたのは、「水無くして」作られたアメ玉の「アメ」ではなく、栄養豊富な発酵飲料の「飴」であったという説には説得力があります。

## ③ 吾平山陵

正式には、吾平山上陵（あいらのやまのうえのみささぎ）と呼びます。初代天皇である神武天皇のご両親のウガヤフキアエズノミコト（天津日高彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊）とタマヨリビメ（玉依姫）の陵墓です。1874年（明治7年）に明治政府により、可愛山陵、高屋山上陵とともに神代三山陵の一つとされました。





現在、宮内庁書陵部が管轄し、桃山陵墓監区 吾平部事務所があります。

昭和 10 年に昭和天皇、昭和 37 年に皇太子殿下当時の今上天皇および皇后が参拝されました。

吾平山陵は小伊勢といわれるように、伊勢神宮に似た景色とおごそかな雰囲気があり、参道を歩き参拝すると心が洗われるような気持ちになります。

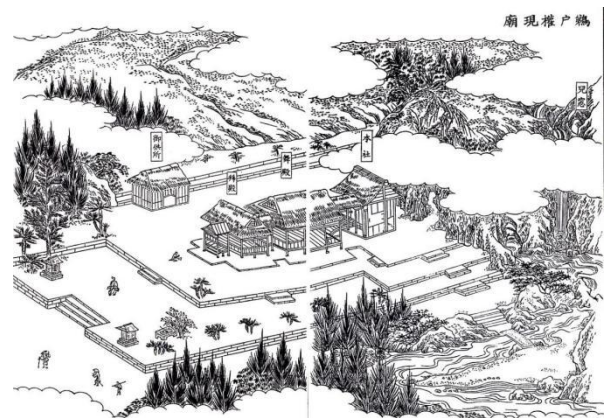
参道の回りは、高い広葉杉（こうようざん）の林からなっています。途中に、伊勢神宮内を流れる五十鈴川と同じような趣で始良川（あいらがわ）が流れており、御手洗場（みたらしば）が作られています。

参道の行き着いた所で、始良川を前にして、向かいにある鶺鴒山の岩屋（鶺鴒岩屋）に向かって参拝します。岩屋（洞窟）の中には大小の 2 つの塚（御陵）があるそうです。

吾平山陵には、世間にはあまり知られていない話題も多いです。それについては第 4 回の「吾平の観光名所の魅力と不思議」（9 月 12 日に開催予定）でお話します。

#### ④ 鶺鴒神社

ウガヤフキアエズノミコト、タマヨリビメ、ヒコイツセノミコト（彦五瀬命）、イナヒノミコト（稲飯命）、ミケイリノノミコト（三毛入野命）、カムヤマトイワレヒコノミコト（神日本磐余彦尊、神武天皇）の 6 柱を祀ります。かつては鶺鴒六所権現と称されていました。もともとは吾平山陵の奉拝所東側の高所にありました（下図の右側は、三国名勝図会にある江戸時代のもの）。災害で大破し、明治 4 年に吾平山陵の北方 6 キロメートルの八幡神社境内に仮に遷座しましたが、その後に帰社しませんでした（八幡神社は別の場所に遷座）。



## ⑤ 桜迫神社と神代聖蹟西洲宮跡

肝付町宮下（みやげ）の宮富小学校の西隣に、桜迫神社（おうさこじんじゃ）があります。桜迫神社には、ウガヤフキアエズノミコト（神武天皇の尊父）が祀られています。ここはウガヤフキアエズノミコトの宮居（皇居）である西洲宮（にしのかにのみや）跡で、神武天皇の生育の地と伝えられています。

境内の南西側の雑草が生い茂った空地に、「神代聖蹟西洲宮」の石碑があり、昭和15年に「神代聖蹟」として鹿児島県知事の指定を受けています。



宮下は水上交通の要となっていて、近くの肝属川には、昔、船着場があったそうです。今よりも火山活動による火山砕屑岩の堆積が少なく、低地が広がっていた地形であったと推測されます。

## ⑥ 神武天皇御降誕傳説地とイヤ塚

桜迫神社から歩いて5分くらいの場所で、肝付町宮下の肝属川の土手の下に「神武天皇御降誕傳説地」の石碑があります。石造りの低い塀で囲われて綺麗に整備されています。もともとは河川敷にありましたが石碑の下部は陥没して埋もれていたそうです。堤防ができた際に、地元の人が私費で現在の位置に移設し、整備しました。

肝属川の古い渡船場に当たる水上棚は、玉依姫ここを通過のとき俄かに御産気を催させ給うて、御産屋が営まれ神武天皇が御降誕遊ばされた所と伝えられています。

胎児を包んでいた膜や胎盤などを胞衣（えな）といいます。地元の方でイヤといいます。イヤ塚は、神武天皇がお生まれになった時の胞衣を埋めた場所です。神武天皇御降誕傳説地の石碑の近くにある民家の、竹の生垣の中にあります。地元のご老人に場所を尋ねたら、案内してくださいました。

なお、この地区名を「イヤ前」といい、この地方最古の墓地と言われている「イヤ前墓地」も近くにあります。





## ⑦ 神武天皇御発航伝説地

肝属川が志布志湾に出る河口近くの両側の高みに、向かい合うように「神武天皇御発航伝説地」の石碑があります（写真の左側）。一つは、東串良町柏原にある戸柱神社に至る階段を登った右側の境内にあります。神社の祭神はスサノオノミコト（須佐之男命）、ヤチマタヒコ（八衢比古神）、ヤチマヒメ（八衢比売神）の3柱です。

もう一つは、肝付町波見の戸柱神社横の長い階段を登り切った権現山斜面の、大隅花崗岩の上にあります（写真の右側）。神社の祭神はサルタヒコ（猿田毘古神）、オオナムチ（大己貴神、大国主）、オオワタツミ（大綿津見神）など8柱です。

東串良郷土誌には、『県は紀元二千六百年を記念して、神武天皇聖蹟調査会を組織され、昭和十五年十一月十九日神武天皇聖蹟地として県知事が指定、柏原松林内、戸柱神社東の方に「神武天皇御発航伝説地」また山王屋敷に「神武天皇御駐蹕〔ちゅうひつ〕伝説地」の記念碑を建立した。』と書かれています。一方、高山郷土誌には、『波見港は、神武天皇が舟出された港と伝えられている。』と書かれています。

なお、神武天皇が日向国を出立なさった当時の日向国は、薩摩国・大隅国・日向国全部を含んでいました（西暦713年に大隅国として分立）。



## ⑧ 大川内神社

ヒコホホデミノミコト（彦火火出見尊、山幸彦）、ウガヤフキアエズノミコト、タマヨリビメ、カムヤマトイワレヒコノミコト（神日本磐余彦尊、神武天皇）、アヒラツヒメ（吾平津媛、阿比良毘売命）の5柱を祀っています。吾平山陵から南方約4キ

ロメートルの神野（かみの）の大川内にあります。

神武天皇の皇后である「主神アヒラツヒメ（吾平津媛）は、神武東征に御子手研耳命（タギシミミ）を随伴させ、みずからは吾平の地にとどまり、ひたすら夫の君やわが子の御東遷・武運長久を御祈りになったという。」と説明板に書いてあります。

なお、アヒラツヒメの出身地に関する資料として、大隅史談会の史論集「大隅」第25号（1983年）の101頁に、宮地俊貴氏が「東串良郷土史 875頁以下では、神武天皇にまつわる伝説として、神武天皇は右の畝傍ドン<sup>（トノ）</sup>の処で誕生されて前述の宮下部落で成長され、長じて吾平町神野の吾平津姫を后とされたとも謂うと記載」と書かれたものがありました。



### 3 大隅地域の神話伝説地について思うこと

建国神話に関わる場所は、以上の他に大隅地域にはまだ沢山あります。

例えば、「神代三陵（かみよさんりょう）」または「神代三山陵」とは、日本神話に登場する神々である瓊瓊杵尊・彦火火出見尊・鸕鷀草葺不合尊ら3神の陵の総称です。その一つである高屋山上陵は、明治の初めころまで、内之浦の北方村国見岳（現・肝付町）山頂付近にあったと定説化されていました。しかし、三島通庸（みちつね）の主張が通り、明治7年に高屋山上陵は始良郡溝辺村神割岡と比定されました。

天照大神 — 天忍穗耳尊 — 瓊瓊杵尊（可愛山陵） — 彦火火出見尊（高屋上陵）  
— 鸕鷀草葺不合尊（吾平上陵） — 神日本磐余彦尊 [神武天皇]

明治5年6月に明治天皇が西郷隆盛など公武官を従えて鹿児島に巡幸された際には、鶴丸城から皇祖の眠る薩摩川内市の可愛山陵、内之浦の高屋山陵（国見権現）、鹿屋市の吾平山陵の三山陵を遙拝されたといわれています。

標高886mの国見山山頂にある国見権現には彦火火出見尊（山幸彦）を祀る祠があり、文化14年（1818年）9吉日の銘がある石灯籠をはじめ古跡塔があります。

今回紹介した所だけでも、大隅地域は建国神話の物語ができるようなロマンのある地域です。それらを残そうと努力された、この地域の先人たちの思いと功績に敬意を表します。

これだけの多くの建国神話の旧跡や神社があり、先人達が大切に守ってきたことを考えると、大隅は建国神話の始まりの聖地であることを、自信を持って声を大にして言うべきであると私は思います。





現在、吾平山陵を除いて、建国神話の伝説地を訪れる人はきわめて少なく、地元の人々の関心も薄れているようで、残念に思います。

今後、吾平地域に限定せずに、大隅地方が広域的に連携して、先人たちの思いを蘇らせ、この魅力ある遺産・資源を輝かせる方策を考え、具体化するのが我々の使命であると思います。

#### 4 神話の価値に関する参考資料

戦後、建国神話の解釈や関連場所の比定について、否定的な意見が多くなりました。その背景には、神話が史実でないとか、皇室の権威付けのフィクションであるという戦後の思想界や教育界の影響があると思います。

神話が史実でないから価値がないというのは、私は薄っぺらな考えだと思います。以下に、その根拠になる見解が書かれている資料から、いくつかの見解を引用します。

##### ① 津田左右吉著「古事記及び日本書紀の研究 一 建国の事情と万世一系の思想」(毎日ワンス)

『古事記』及びそれに応ずる部分の『日本書紀』の記載は、歴史ではなくして物語である。そして物語は歴史よりもかえってよく国民の思想を語るものである。

(この本は、有名な学者が書いたもので、記紀が皇室の権威付けのために書かれたフィクションである根拠として、戦後、建国神話を否定する宣伝に利用されてきた。実際は、神話の価値が書かれている。)

##### ② 福田恆存「建国の祝いについて」(昭和四十年「自由」四月号)

私はこれまで、当時の人間の心の動きだとか、価値観だとか、さういふものが単なる史実以上に大事だといふことを何度も言つてまゐりましたが、最近大いに意を強うしたことに・・・丸山真男さんはこれまで進歩派の象徴と見なされてゐた人で

すが、その中でかういつてをります。「ぼくが日本神話を大切だといふのは、古代人の世界像とか価値判断のしかたが現れてゐる点です。考古学的事実史の上からいふと、ぼくはしろうとだけれど、思想史からいふと、決定的に重要なんですね。記紀の話は事実としては作り話であつていいわけです。・・・」

「日本神話は古代の天皇制を合理化するためのイデオロギー的体系である」といふ目的意識的な面だけを見るのではなく、神話の素材には実際に日本の各地方地方でおこなはれてゐた祭儀とか、民間伝承とか、さういふものがすくなくとも出雲神話などにはあるわけですね。丸山さんはさういふものを知ることが大事だといふことをいつてをります。……(中略):…

### ③ 文芸批評家 都留文科大学教授・新保祐司 「信時潔に「建国」への思い馳せる」 (正論 2015.3.)

神話」という「フィクション」は、福田恆存がいったように「事実」であり「実在」なのである。この精神の深みにおいて「事実」「実在」として把握される「神話」というものを「史実」であるかどうかというような平板な観点からしか捉えられないところに、「戦後民主主義」の悪弊としての卑俗な現実主義が露呈している。福田がいうように「人生も現実も、自然も歴史も、すべてがフィクション」なのである。しかし、この「フィクション」はすべて事実であり、実在なのである。この精神の緊張が人間から失われれば、人格という「フィクション」も崩壊するのであろう。

### ④ レヴィー＝ストロース「神話と意味」 (みすず書房)

私たちの社会では、神話に代わって歴史がそれと同じ機能をはたしているのだと言ってしまうと、それは私の信ずるところをあまりはずれておりません。文字や古文書をもたない社会においては、神話の目的とは、未来が現在と過去に対してできる限り忠実であること——完全に同じであることは明らかに不可能ですが——の保証なのです。ところが私たちは、未来はつねに現在とは異なるものであるべきだ、またますます異なったものになってゆくべきだ、と考えます。そして、どのような相違を考えるかは、ある範囲までは、もちろん私たちの政治的傾向によって左右されます。私たちの心のなかで、神話と歴史のあいだにはある断絶が存在します。しかしながらこの断絶は、歴史の研究によっておそらく打ち破られるでしょう。ただしそれは、歴史を神話から切り離されたものとは見なさず、神話の延長として研究することによって可能になるのです。

### ⑤ ジョーゼフ・キャンベル・ビル・モイヤーズ「神話の力」 (早川書房)

神話学の巨匠と呼ばれたジョーゼフ・キャンベルによりますと、神話には4つの機能があるそうです。すなわち、私なりの理解の表現も加えると、第一に神秘的な役割(あらゆる物象の底にある神秘の認識への導き)、第二に科学が関わる未知への神秘の付与、第三に社会的な機能(社会秩序を支え、それに妥当性を付与)、第四に教育的な機能(人間らしく生きる教え)。

### ⑥ ユヴァル・ノア・ハラリ著「サピエンス全史(上)」 (河出書房新社)

人類には種類がいくつかあったが、ホモ・サピエンスが生き残って文明を築いたのは”虚構”をつくることができたためである。虚構とは、伝説、神話、神々、宗教、組織などの架空の事物について語る能力であり、それにより集団を作ってまとめ、協力体制ができた。虚構こそが見知らぬ人同士が協力することを可能にした。